

保育の現場から

遊びの中の協同とは……

相馬 靖明

「私、勘違いしてたかもしれません……」

十一月のある日、作品展に向けての取り組みのため、連日遅くまで勤務が続いている年長組の様子を見に行った際、今年三年目で初めて年長組を担当するA先生が私にもらした言葉です。

年長組では、自分たちが行ってみたい場所をテーマに、クラスごとに話し合い、保育室の中がジャングルや迷路に変身する「共同制作」に取り組みことになりました。A先生のクラスでは、少し前からお化けのイメージで遊び始めた子どもた

ちがいたこともあって、お化け屋敷をすることにまりました。

「共同制作って、大きなものをみんなで作ることだったんですね」

A先生は、他クラスの保育室の様子と見比べて「共同制作」の意味を取り違えていたというのです。

「他のクラスは、何人かで大きなものを作ってあるんですけど、うちのクラスは、結局一人ひとりでごまごまと作っていて……」

大きな黒い紙で囲み、ブラックライトを設置し



た暗がり（そこにもぐり込んでおしゃべりをして
いると、歯が光って面白いらしい……）。紐を引
き下げると天井の滑車を經由してろくろ首が登場
する箱（顔がクルクルとまわってしまうのでどう
にかしたいと相談していたようですが、結局それ
がおもしろいと、正面向いて出てきたら大当たり
の占いろくろ首ということに……）。それらの大
がかりなものも作ったのですが、次第に、お化け
キャンディー、血のジュース、コウモリ、ガイコ
ツ……と、作ってみたもののイメージが広がっ
て、個人個人が作っているというのです。

「そうかなあ……。個々に取り組んでいても、
クラス全体の『黒』のイメージや『いたずら』な
イメージから逸脱していないし、さつきあなたが
話していたように、ガイコツを何個も作っている
子は、二つめと三つめとは細かいディテールが
違っていたよね……。共同制作といっても、個の

追究のないところに共同の追究もないわけで、
よっぽど子どもたちが楽しんでいるから、いいと
思うよ」

「ピンクの紙ください。

足りなくなっただけ」

ふだん職員室にいと、保育室で足りなくなっ
た色画用紙などの素材を取りに子どもたちがやっ
て来ます。このところ、A先生のクラスの子ども
たちが頻繁に来ていました。全く来ないクラスも
あります。このことの意味は、いろいろと考えら
れるのですが……。A先生のクラスでは最初、お
化け屋敷というネーミングを投げかけたくらい
で、プランとしては大まかなものだったようで
す。結局、子どもたちがやってみることを思い
つくその都度、必要な素材を提示していくこと
になり、足りないものは「職員室に行ってもらって

来て」となったようです。

年長児の協同的な活動を考えるときによくあるのは、次のようなプランの立て方ではないでしょうか。まずは、保育者の側でおおまかな日程を決め、子どもたちと相談してテーマとグループごとの具体的な活動を決定していく。次に、グループごとの場を選定し、必要な素材を用意する。さらに、一日の中でのグループごとの活動時間を決め、時間の表示などを工夫して、その時間になったら集まってグループごとに取り組めるようになる……。

ゴールを設定し、そこに向かうことを強調することも大切ですが、ゴールの設定の仕方があまりにタイトだと、そこには落とし穴が待っています。

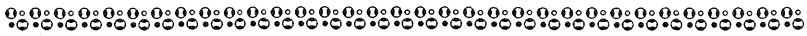
「共同制作」といったとき、大がかりなものの設計段階で保育者の出番です。たとえば、立体構造

にするために何を使ったらよいかを提案することとは、子どもたちには荷が重いでしょう。しかし、そのあとの取り組み方が、たとえば、保育者が適切な材料を適切な数量用意し、手順通りに組み立てるといったように、一本道でリニアなものであった場合、できあがったら「一丁上がり」で、作品としては完成しても、遊びとしては終わりとなってしまいます。

遊びの中の協同とは……

Bちゃんをめぐつて

A先生は、「共同制作」とは「数人で大がかりなものを作ること」とタイトなくくり方をしているなかったので、子どもたちをそこへ追い込もうとしなかったとも言えます。しかし、まわりのクラスで、見栄えのする立派なものが次々とできていくに従い、「勘違いしていた？」と思ったので



しよう。

ところで、一学期からA先生を手こずらせていたBちゃんという子がいます。みんなで一緒に何かをするときにはスピンアウトしてしまう子です。A先生も普段はBちゃんとのつながりを確かめながら保育をしているのですが、大きな行事に向かっている時期は、その余裕がなくなります。

今回の作品展に向けての日々でも、Bちゃんはしばしば職員室にやって来て過ごしていました。

ところが、ある日からBちゃんが職員室に顔を見せなくなりました。クラスの友達が数日かけて作ってきたものが形を見せてきたことで、Bちゃんの脳細胞が活性化しようです。お化けの迷路には入口と出口があるのですが、Bちゃんは反対向きの小さな小さな矢印を作り、出口を入口に、入口を出口にしています。Bちゃんの反対向きエネルギーが、逆にお化け屋敷の世界にはマッ

チしたのでしよう、周囲の友達からも受け入れられているようです。そんなBちゃんはまるで「いたずらお化け」そのものです。今度は、お化けのお菓子里に賞味期限を書き込んでいます。「1996ねん2がつ10にち」それくらい古くないとお化けのお菓子らしくないのだそうです。

幼稚園教育要領の改訂をめぐって「五歳児の協同的学び」という言葉に注目が集まっています。遊びの中の「協同的な学び」とは、A先生のクラスの子どもたちが巻き起こしたような、個々別々の知的な追究がいつの間にか共同の追究になり、そのことが新たな個の知的追究を誘発していく、そのようなプロセスを指しているのでしょうか。





これは、日本の幼稚園教育がその中心を遊びにおき、大切にしてきたことそのものでもあります。

しかし、活動の仕方が協同的になるように仕組むだけでは、遊びから離れてしまう危険をはらんでしまうでしょう。その意味で、A先生の「勘違いしていたかも……」というエピソードは「協同的な学び」を考えるとときの示唆を与えてくれます。

ところで、前述のBちゃんをめぐる、めでたしめでたしのエピソードには、もうひとつの裏話があるのです。そして、それが実は、Bちゃんのおさやかな「協同的学び」を支えていたと考えられます。

子どもの願いを信じて支えること

A先生が、クラスの他の子どもたちとお化け屋敷作りに没頭している間、Bちゃんは職員室で過

ごしていたと先に述べました。多くの子どもたちが片づけを終えて各保育室に引き上げていったあの園庭で、フリーの先生たちが落葉掃きをしている時のことです。Bちゃんは自分もやりたいと、大きな熊手を手に落葉を集め始めました。

「Bちゃん、ほんとに落葉掃き上手ね」とフリーの先生たちから褒められて、今度は軍手も借りて本格的な熊手を扱う手つきに、お迎えにやって来たお母さんたちからも「上手ね」「ご苦労様」と声がかけられます。

「Bちゃん、なかなか、さまになっているね」と私も近くに行き声をかけると、一緒にいたフリーの先生が、「Bちゃんは、ここは葉っぱが濡れているから年少さんが滑らないように掃いてくれているんですよ」と、教えてくれました。そこは、子どもたちが「ぼうけんのもり」と名づけて

いる茂みの中の小道です。あまり手入れをせずに自然のままにしている茂みなのですが、毎日もぐり込んでいく子どもたちが踏みしめた、けもの道(?)ができています。

丸太を組んだ遊具の内側に落葉がたまっていたので「ここにもたくさん落葉があるけど?」と聞いかけるとBちゃんは、「そこは、子どもたちがたき火をしているところなんだよ」と、落葉を残している理由を話してくれました。

このようなBちゃんの姿を思い起こしてみると、先に述べたお化け屋敷をめぐるのBちゃんの知的な追究や、クラスの友達とつながった協同追究の姿は、そこに至るまでの時間を支えていた人たちの存在があったからこそだったといえます。

みんなでする活動などではクラスからスピンアウトしてしまいがちなBちゃん・大人のしている

ことには興味があるけれど友達と遊ぶのは苦手なBちゃん、ととらえられがちです。しかし、どうしてどうして、まわりの子どもたちの様子をとなえ、そのことを受け止めていることがわかりますし、本当は力いっぱい幼稚園で過ごしたいと願っていることも伝わってきます。

フリーの先生たちは、Bちゃんのような願いを信じて支えていたのでしょうか。

終わりに

A先生は、「共同制作」らしくはないかもしれないけれど、クラスの子どもたちが満足して遊んでいる様子はうれしく思っているようです。でも本当は、作品展だからそうなるのではなく、いつもの遊びでこれくらい子どもたちがリキ入れて遊ぶようになるといいんだけどなあ……。

(文京学院大学ふじみ野幼稚園 副園長)